

お彼岸

平成25年3月第3週放送

春しゅんぶん分の日と秋しゅうぶん分の日のそれぞれ前後三日ずつの一週間をお彼岸といい、その間に皆さんは、お墓参りに行く習慣があると思います。

お彼岸は、日本で始まった習慣で、初期の頃の目的は、春分の日と秋分の日にお経を読み、食事の時間を守ることで、長生きを願うという行事であったようです。それが春分・秋分の日ちゅうにちの前後三日ずつを足して「彼岸の入りの日・お中ひがん日・明けの日」と呼んで、彼岸ひがんに到るための修行週間ともいえる七日間になったようです。

お彼岸は、「到彼岸とうひがん」、「彼岸いたに到る」。つまりは、「お悟りさとの世界いたに到る」ことを願い、修行を行う期間なのです。

では、その彼岸であるお悟りの世界に到る修行とは何でしょう。

『布施ふせ』、他人ほどこに施なせる自分に成る事。『持戒じかい』、戒律かいりつを守り、確かな信仰心たもを持つ事。『忍辱にんにく』、自分の主張たをせずしのに堪え忍ぶ事。『精進しょうじん』、何に力を入れるべきか見極めてそれに向かって努力する事。『禅定ぜんじょう』、坐禅ざぜんを組んで精神を落ち着かせ、精神に余裕を持って物事に当たる事。『智慧ちえ』、お釈迦さまの教えよに依り真実を理解する事。この六つの修行を『六波羅蜜ろくはらみつ』といいます。

この六つの修行の中の一つだけでも、お彼岸中に心がけてみるのはいかがでしょうか。例えば「堪え忍ぶ」という『忍辱にんにく』には、「自分の都合で考えたり生活をしたりしない」ということが含まれていると思うのです。せっかくの修行週間ですので、自分勝手つつしを慎んでみるのはどうでしょう。

道元どうげんさまは、『彼岸到ひがんと』という言葉を使っています。「祇ただひたすら坐禅をしていれば、彼岸が到る」というのです。普通は、修行をして悟りの世界へ到ると考えるのですが、道元さまは、ひたすら坐禅をしていれば、修行しているうちに悟りの世界が現れると考えていたのです。

「お悟りが到る」とは、自分の力だけで到るものではなく、自分に縁えんが巡り集まり来た時に現れる世界なのです。自分の力で必要なのは「正しい仏ぶつ法ぽうを心に念じて忘れないこと」だけなのかも知れません。

この場を、悟りさとの場、「お彼岸」にできるかどうかは、私達自身の生き方次第であると示されているのです。「お彼岸」とは、自分の修行の先あに在るのではなく、自分が信仰心いましと戒たちめを持つと同時に存在うし得るものなのです。

— 終 —